リ　一　東　北　　2025年（令和7年）9月21日（日曜日）

併せて生産者の課題解決を

政府が普及掲げる「乾田直播」

記者リポート

盛岡支局　福山 拓司

コメの増産にかじを切った政府は、乾いた田んぼに種もみをまく栽培方法「乾田直播」の普及を支援する方針を掲げる。主流の移植栽培と比べ、労働力やコストを抑えられる利点から、既に取り入れている生産者は有効性に実感を込める。普及は将来の増産に欠かせないが、コメ不足や価格高騰の教訓からも、新たな技術を広めるだけでなく、生産者が抱える課題の解決を併せて図ることが必要だ。

盛岡市の農研機構東北農業研究センターによると、国内で乾田直播の面積は国内で増加傾向にあり、近年は乾田直播の伸びが大きい。乾田直播は、東北地方では「プラウ（＝すき）耕鎮圧体系」などの技術が主流で、太平洋側を中心に作付けが年々増えている。

「作業はおおむね、①耕起、砕土や整地、均平を取るなどほ場の準備②施肥③種まき④出芽後の入水―という流れで進む。苗作りや代かき、田植えの作業が不要。苗を田んぼに運ぶなどの手間や人手もかからない。一方、移植に比べも肥料や除草剤の費用がかかる。

同センターは、▽ほ場の均平効果と鎮圧効果を効かせる▽乾田期はほ場に水が停滞しないように管理する▽雑草防除を徹底する―などの心がける点を挙げる。

岩手大農学部の下野裕之教授によると、国内では移植がおよそ98％を占める。下野教授は、従来は兼業農家が広すぎない農地で生産していたため作業を回せた、と説明。だが、高齢化の進行や離農の増加、大規模な担い手への農地集積を背景に、移植だけでは手が回らなくなってきている―とし「担い手が少なくなってきた中、どのように産業を維持していくかが課題だ」と強調する。

乾田直播は、面積が広くても労力がかからないため、大規模経営でメリットをより生かせる栽培方法とみていいだろう。

八幡平市でコメを生産する株式会社かきのうえは今年、水稲約58㌶を作付け。うち約31㌶は乾田直播で栽培した。立柳慎光代表は「営む面積はさらに増えるだろう。どうカバーしていくかを考えれば、乾田直播は必須だ」と期待をかける。

立柳代表には、地域の景観も担う農地を荒らさずに管理し続けたい、との思いがある。今春は突然、作付けできなくなった人から農地を任されたが、乾田直播をやっていたおかげで対応できた。「こういうケースは今後頻出してくると思う。高齢化が進むので、離農は止められない」と語る。

離農により使われていない小さい農地が離れて点在する例もある。大規模な担い手が引き受けても、作業場所が分散しては効率が上がらない。立柳代表は、国が増産に踏み切った今こそあらゆる課題を見直し、将来へ持続可能なコメ生産を実現させる好機―とし、意欲のある生産地域のためにも、国に対し大区画のほ場整備や、大切なインフラである水路の整備・維持の実行を訴える。

農研機構東北農業研究センターによる「乾田直播」栽培のほ場。豊かな実りを見せる＝5日、盛岡市

※デーリー東北 令和７年９月21日付　５面
　デーリー東北新聞社の許諾を得て掲載しています
※無断転載・複写を禁じます